
永遠の華

春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠の華

【Nコード】

N3062T

【作者名】

春

【あらすじ】

ある日突然主人公華の運命は、回り始める。
華の見方という少年、輪。
爆発音とともに登場した、水樹。
さまざまな、人物とともに、始まる、華の運命。

序章

後ろから誰かが追ってくる。

怖い。

鼓動が速くなる。助けて。誰か。

少女のきれいな瞳から、涙がこぼれる。

「きゃっ……。」

ドサツッ！

木の根に引つ掛かり細い体が倒れる。どんどん足音が近づく。まず鼓動が速くなり、涙が大粒になる。

「っ……誰かつ……助けて！」

その、小さく高い声とともに足音が消えた。しばらくしてから、影から男の人影が出てくる。そして、震える少女に優しく手を回す。

「もう大丈夫だよ。怖い思いさせてごめんね……。」

少女は男の手を優しくつかむ。そして訪ねた。

「貴方は、わたしを殺しに来たの？」

震える声を振り絞り言う。男は笑顔を作り少女の耳元でささやく。

「違うよ。私はあなたを探してここまで来た。貴方を守るために。」

「……守る……？」

その瞬間、とても温かな、ぬくもりを感じ意識が途切れた。

この時から、彼女の運命が大きく動きはじめる。

すべての始まり

少女は頭に温かみを感じ目を覚ました。瞼の奥には、少し赤みを帯びた瞳があつた。恐る恐る目を開くと、見たことのないベットで眠っていた。そして男が一人少女を見つめていた。ほほ笑む。心の奥から、経験したことのない緊張が流れ込み小刻みに揺れる。

「・・・。怖がらないで。そんなに警戒されたら悲しくなっちゃうよ。」

男は少女をとてもしそうな目で見ている。その目はまるで少女に何かを訴えているようだった。急に涙がこぼれおちてきた。

「貴方は、何を求めているの・・・。なぜそんな瞳で私を見るの・・・。」

眉をしかめる。しかしすぐに笑みを浮かべ少女の涙をぬぐう。

「ごめんね。自己紹介まだだったね。俺は、輪。よろしくね華ちゃん。」

輪は当然のように華の名前を言う。

「なんで私の名前知ってるの・・・？」

「なんでか・・・。それは運命だからかな。」

「運命・・・？」

「ドンッ」

どこからか爆発音がした。輪が顔をしかめる。

「水樹か・・・。華ちゃん俺ここから離れるけどこの部屋から出ないでね。」

いきなり昨日のような感情に包まれる。怖い、嫌だ、誰か・・・。お願いだから私を一人にしないで・・・。華はとつさに部屋のドアを開けて、部屋から出る。

さつき輪が言ったことなどもう頭になかった。部屋を出たら長い廊下が続いていた。華はその廊下を走ろうと見つめる。駆け出そうとした途端、背筋が凍った。

「みつけた。」

振り向いたらそこには知らない男が一人立っていた。

黒い羽根

「離して・・・」

「嫌だよ。ここで離したら捕まえた意味ないでしょ。おっと、失礼。」

そっぴいなから、男は笑いながら後ろを向く。そこには、息を切らした輪が立っていた。輪の眼は男を睨むように、赤く染まっていた。「華を離せ。」

「二人揃ってなんなのさ・・・。離せって言って離したらー」

男のよこを炎が通る。頬からゆっくりと血が流れた。男が華の耳元に口を寄せる。

「今日のところは引き上げるけど、華ちゃんをさらうためにまた来るから。俺の名前は水樹。」

そっぴいた後に華の首元にキスをした。華が顔を赤くする。輪はその小さい出来事にきずいていないらしい。水樹がキスしたところに少し痛みを感じた。そして華の手を離し窓から出て行った。輪が華に駆けつける。

「大丈夫？」

首を縦にふる。華はキスされたところに手を押さえる。熱い。輪の顔を見つめるとさっきの赤い瞳は元のきれいな青い瞳に戻っていた。「さっ、部屋に帰ろう。」

のばされた手をつかみ立ち上がる。ふらつく。部屋に帰った後、輪は華を叱ることもなく、華のことだけを心配してくれた。華は再び首元を押さえる。ふと時計を見たら短い針が12を指していた。外はもう真っ暗だ。華は静かにベットに入り目を閉じた。

華・・・・・・・・華・・・・・・・・

誰かに呼ばれている気がする・・・・

誰？

俺だよ・・・・

誰・・・・・・・・？輪くん？

俺だよ・・・・

嫌な予感がし目が覚めた。もう朝だ・・・・眠った気がしない。鏡を見ると首元に黒い羽根のマークがあった。口が動かない。ドアをたたく音がした。

「華ちゃん、起きた？入るよ。」

とつさに言う

「きつ・・・着替えているので・・・・」

「そうか、ごめんね。またあとで来るね。」

・・・・どうしよう。このマークを隠さなければ・・・・

青い涙

華はとっさ的に首がついた服を着た。今は対処できたもののこれからずっと隠せるわけでもない。

「・・・どうしよう。」

顔を下にやる。

「華」

輪だ。顔を上にあげて眉を上にあげる。

「どうぞ・・・。」

数秒後にドアが開く。体中が、凍る。輪が近ずいてくる。・・・。

「嫌っっ！来ないで」

口開く。華は自分が言ったことが理解できなかった。なぜ・・・。輪が華を見つめる。顔を横に向ける。

「あーあ、残念嫌われちゃったね。」

華の後ろの窓が開き冬の雪とともに男が現れる。首元が温かいぬくもりに包まれた。華は後ろを振り向かなくても分かった。水樹だ。

小声で言う。

「俺のところに来る・・・それとも輪と一緒にいる？」

華は迷わず言ってしまった。

「・・・み・・・みず・・・き・・・君と・・・」

まっていたかのように

「了解」

と告げられ。水樹に抱きあげられ顔を閉じる。この時最後に聞いたのは、輪が「華ちゃん！」と叫ぶ声だった・・・。

ゆるる心

華が目を覚ましたのは冷たく肌寒い倉庫のようだった。身体を動かそうとしても動かなかった。水の音がする。それとともに足音もする。

「気分はどう？」

壁に寄りかかり、必死に目をそらす。機嫌を損ねたように華に近づく。

「・・・気分はどう？」

華の顎を引く。

「なんで、何でこんなことするの・・・。」

水樹は立ち上がり、話し始めた。

「華は、俺たち悪魔にとって必要な存在なんだよ・・・。」

「悪魔・・・。」

「そう。それに対して輪は天使ってところかな・・・。」

・・・悪魔、天使・・・。

「俺と輪は兄弟なんだよ。」

華の顔が一転する。兄弟・・・兄弟なのになぜ戦っていたの？それになぜ、悪魔にとって私が必要なのだろうか。

「華は千年に一度生まれる混血の悪魔使・・・。そんな華が俺たち悪魔側についてくれれば良かった、悪魔と対天使の戦いが終わる。」

華は言っている意味がよくわからなかったが、一つだけわかったことがあった。

「私は・・・水樹君か・・・輪くん・・・どちらか一人を裏切らなければいけない・・・。」

「・・・。」

水樹が再びしゃがみ華を押し倒し服を破り、黒い羽根のマークのところに手をやる。

「俺がもう一度ここにキスをすれば、華は完全に悪魔になり、今の

華を完全に忘れ、悪魔の華となって生まれ変わる……。やろうと思えば今からでもできる。」

「嫌っつ……。」

「……。俺そんなにひどくないから……。でもいずれ16の誕生日までに決めなければいけなくなる。今日は2月3日、華の誕生日は2月14日……。あと11日……。」

水樹は苦しそうな顔で立ち上がりドアノブを引いた。

「チヨコはいらないから……。愛をちょうだい……。」

……。身体が動かないのは相変わらず。変わったのは瞳から流れる……。

涙

あの時

息が苦しい。さつきから涙がこぼれおち呼吸が速くなる。鳥の鳴き声がした。さつきとは一転して、明るい日差しが、隙間から少し流れ込んでくる。一日過ぎた。決断まであと11日。このまま決断しなければ自分は水樹のものとなり今の自分を失ってしまうのだろうか。そう考えると怖くてたまらなかった。しかし、華には二人を選ぶことのなとでもできないものだった。ふと記憶もたどっていくと頭に思い浮かんだのは輪だった。今どうしているのだろうか？華は輪とであつた時のことを考えた。

「なんで私は輪に助けられたんだ……」
私が悪魔使だから？じゃああの時悪魔使じゃない私がいたらどうなっていたのだろうか。あの影に……。

「あの影は誰？」

あの影は……

「ああああっ！」

首に激痛が走る。

「うつうつ……。」

痛い。何だろうつこの痛みは。生まれてから一度もこんな痛みを味わったことはない。

「かわいそうな子」

目の前には水樹が立っていた。その手には華と同じ黒い羽根のマークが描かれていた。水樹が頬を羽根のマークにすりよせる。

「いやっ……！！」

そして今度は唇を触らせた。

「いやーーーーー！！」

華は力を失い倒れこむ。

「華、もう少しで悪魔かが始まってくるよ……。」
！

「なんで水樹は華のマークのところにはキスをしていないはずだ。
「なんで・・・。」」

謎

「ここは悪魔のあじと。ここには天使の力を弱める結界が貼ってある。この中では天使の力は普段の千分の一にまで小さくなってしまふ。どんなに強い天使が来ようと今のおれにかなうやつはいない。一人の天使を除いてわな・・・。」

「一人の天使つて・・・？」

「悪魔の輪」

あくまの・・・りん・・・
どういう意味だろう。考えても答えにたどりつける気がしない。

「……………」

言葉とともに水樹が倒れた。

「水樹君！」

わずかに残っている力を振り絞り、水樹に近づく。

「華……………」

かすかに声がかすれていた。

白と黒

「水樹君！」

懸命に呼ぶが水樹は目を開かない。華ははつとする。

「天使の力は弱くなる

水樹が最初に言った言葉だ。

「……。水樹君。本当は、天使だったんだね。」

強く抱きしめる。

「本当の悪魔は輪くん……。貴方だったんだね。」

華は後ろを向く。輪をまっすぐな眼で睨みつける。

「私はあなたの味方にはならない……。輪くんと水樹君の過去には何があったんですか？私、知りたいです。」

「おしゃべりしすぎだ華」

急に首が縛られたように苦しくなる。

「水樹は言い忘れていたようだね。悪魔の結界の中なら悪魔の力は天使の何千倍にもなる。今のおれに勝てるものなど誰もいない。」

「なんで……。水樹君だって……。」

「教えてやるよ……。俺とこいつの過去を」

華はとつさに後ろを向く。水樹が目から涙を流していた。

「やめる輪……。うつつ！」

その瞬間、輪が口を開けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3062t/>

永遠の華

2011年10月9日03時03分発行